吉祥天立像

この吉祥天立像は、長い年月でその輝きは一部失われてしまっているが、それはこの像の古さを考えれば驚くべきことではない。この像がつくられたのは平安時代（794～1185年）であり、その当時は、生き生きとした、まるで本物のような見た目のこの像に、鮮やかな装飾的な色彩がほどこされていたものと思われる。平安時代の像にはよくある傾向として、この像もやや両性具有的な印象があるが、吉祥天は実際には女神である。したがって、人々は古くから吉祥天を多産や美の神として崇拝してきたが、それと同時に、幸運や富など、より一般的な祈りの対象ともなってきた。それにふさわしく、吉祥天が左手に持っている如意宝珠は、吉祥天が実利をもたらす能力を持っていることを示している。この能力は、吉祥天を崇拝する人々にとってはありがたいもののようにも思えるが、仏教におけるヒエラルキーという点では吉祥天に不利に働いている。仏教では、現世での願望を超越することに重きを置いており、現世における富との関係性によって、吉祥天の位置付けは比較的低いものとなっているのである。実利をもたらす能力は吉祥天の属性の中心的なものなので、如意宝珠はいつの時代のどの像でも、吉祥天の標準的な持物となっている。しかし、この像の頭の上に乗せられている、塔のような形をした円錐形の冠は珍しいものである。これは、平安時代の仁和寺およびその周辺における仏像の変化に影響を与えた様々なファクター（文化的なものを含む）を物語っていると考えられる。